

C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese

カルヴィーノとアーティチョーク 37

イメージはどこから降りてくるのか？

～ダンテとカルヴィーノ～

堤 康徳

ダンテ没後 700 年にあたる 2021 年、イタリア国内はいうに及ばず、イタリアからはるか離れたここ極東の島国でも、いくつか興味深いシンポジウムが進行中である。日本における本格的なダンテ研究は、訳詩集『海潮音』で名高い上田敏の『詩聖ダンテ』(1901 年刊)を嚆矢とするが(河島英昭『叙事詩の精神』岩波書店、1990 年、p. 226)、『神曲』という訳語は森鷗外に拠る。アンデルセンの『即興詩人』をドイツ語から訳した鷗外が、この小説で言及されたダンテの『神聖な喜劇 *La Divina Commedia*』を初めて『神曲』と訳したのだった。『神曲』は、大正時代より多くの日本語訳が刊行されてきたが、詳しい解説が付された最新の訳業は、講談社学術文庫版(原基晶訳、2014 年)である。

カルヴィーノにとっても、ダンテは、つねに大きな参照点であり続けた。たとえば、カルヴィーノは科学と文学をめぐる 1968 年のあるインタビューに答えて、ダンテからガリレオに継承された深い使命は、文学の言葉をとおして宇宙のイメージをさぐることにあると述べている(Italo Calvino, *Una pietra sopra*, Torino, Einaudi, 1980, p. 187)。

カルヴィーノの遺作となった評論集『アメリカ講義』(Italo Calvino, *Lezioni americane. Sei proposte per il prossimo millennio*, Milano, Garzanti, 1988)にもダンテをめぐる深い考察が二か所において見られる。まず、第 1 講義「軽さ」

において、ダンテの友人でもあり師でもあった「軽さの詩人」グイード・カヴァルカンティにたいし、ダンテはむしろ、言葉に重さと具体性を与える詩人として対比される。「ダンテにおいては、すべてが堅固さと安定性さを帯びており、事物の重さは正確に定められています。軽やかなものを語るときでも、ダンテはこの軽さの正確な目方を表そうとしているかのようです」(イタロ・カルヴィーノ『カルヴィーノの文学講義—新たな千年紀のための六つのメモ』米川良夫訳、朝日新聞社、1995 年、34 頁)。これはどういうことだろうか？ カルヴィーノの論旨をたどってみることにしよう。



カヴァルカンティの作品において、カルヴィーノが「軽さ」の好例として挙げたのが、「愛する婦人の美しさによってことごとく乗り越えられる定め、

さまざまな美のイメージをかぞえあげることで始まる」有名なソネットである。カルヴィーノのよどみない論証をそのまま提示するために、長い引用になることをお許しいただきたい(翻訳には米川良夫訳を用いたが、カヴァルカンティの詩句など一部を変更させていただいた)。

貴婦人の美しさや賢者の心
武具に身を固めた高貴な騎士
小鳥のさえずりや愛のささやき
海を軽やかに帆走する船

晴れわたる夜明けの空
風もなく降る白い雪
川の流れや花咲く草原
金や銀、瑠璃などの宝石

Biltà di donna e di saccente core
e cavalieri armati che sien genti;
cantar d'augelli e ragionar d'amore;
adorni legni 'n mar forte correnti;

aria serena quand' apar l'albore
e bianca neve scender senza venti;
rivera d'acqua e prato d'ogni fiore;
oro, argento, azzuro 'n ornamenti:

カルヴィーノの引用はここで終わるが、カヴァルカンティのソネットは、「それらすべてを凌駕するのは/わが愛する女性の美しさや美徳、その高貴な心」と続く。『アメリカ講義』の引用を続けよう。

「風もなく降る白い雪」の行は、わずかな変更を加えられて、ダンテの『地獄篇』(第 14 歌、30 行)に取り入れられています。「風もない高い山の雪のように」(come di neve in alpe senza vento)と。このふたつの詩行はほとんど同じですが、それでいながら完全に異なるふたつの観念を表しているのです。どちらも、風もなく降る雪が軽やかな、音のない運動を想起させます。しかし類似はここまでで、ここから違いが始まります。ダンテのほうは、場所(「高い山の」*in alpe*)の特定化によって詩行は支配されており、

それが山の風景を思い描かせます。ところがカヴァルカンティでは、「白い」(*bianca*)という形容詞が冗語的に見えそうですが、「降る」(*scendere*)という動詞 —これも完全に予測可能なのですが— と結びついて、風景そのものを不安定な抽象化といった雰囲気のなかに消し去っています。しかし、このふたつの詩行の意味の異なりを決定づけているのは、とりわけ最初の語です。カヴァルカンティのほうでは、接続詞 *e* (そして、また)が、雪を、前後に置かれた他のさまざまなイメージと同じ平面に並べています。イメージのフーガ的連続であり、またこの世の美の見本市とでもいうようなものになっています。ところがダンテでは、副詞 *come* (のように)が風景の全体をひとつの比喩の額縁のなかに閉じこめています。しかしこの額縁の内部では風景はそれ自身のはっきりした現実性を備えていて、そのことはまた、火の雨が降り注ぐ地獄の情景 —これを描くために雪による比喩が導かれているというわけです— が同じくらい具体的な、また劇的な現実性を備えているというのと同様なのです。(同書、32～34 頁)

カヴァルカンティのソネットにおいて「イメージのフーガ的連続」を現前させるのは、「実在物のカヴァルカンティ的対等化」(ジャンフランコ・コンティニ)の原則である。カルヴィーノによれば、「カヴァルカンティにおいては、人間の形をしたものの材質が多様で、しかも交換可能であるという事実によって、物質の重さが解消される」(同書、31 頁)。つまりここには、ダフネの月桂樹への変身を歌ったオウィディウスの『変身物語』に通じる詩学が見られるのである。このような実在物の対等化と互換性の主題は、『アメリカ講義』第 5 講義で論じられことになる「多様性」と深くかかわる。人、動植物、物すべてに一体性とその変容性を認めることは、カルヴィーノにとっては、「偏狭な人間中心主義」を脱して、無限の多様性と軽さのなかに世界をとらえなおすことにほかならない。

カヴァルカンティのソネットでは、走馬灯のように、あるいは次々と展開するスライドショーのように、美のイメージが移動してゆく。一方、ダンテの

詩篇では、カルヴィーノの言うように、地獄の灼熱の火の粉の比喩であった雪片の舞う高山の風景が、まるで額縁の絵画のように固定されているのである。

『アメリカ講義』第4講「視覚性」に、もうひとつ『神曲』への重要な言及がある。カルヴィーノは、「視覚性」の講義を『煉獄篇』のある詩句の引用から始める。

ダンテの『煉獄篇』のなかに次のような一行(第17歌、第25行)があります。「やがて高次元の想像力のなかに降りてきた」(Poi piove dentro a l'alta fantasia)と。そこで今晚の私の講義は、このことの確認から出発することになります。想像力とは、そのなかに何かしらが降って来る場所なのだ、と。

『煉獄篇』のこの詩句がどのような文脈のなかにあるのかを見ておきましょう。ダンテは忿怒の罪を浄める霊たちの環道にいて、彼の精神のなかに直接つくり出されるイメージを見つめているのですが、それらは聖書や古典が語っている忿怒の罰せられた例を表しているものなのです。そしてダンテはこれらのイメージが天から降って来るのだと、つまりこれらは神が送ってよこすものなのだとして理解しているのです(同書、131頁)。

ダンテが想像力とは何かを定義した、同じ歌章の二連の三行詩節(第13行～18行)もカルヴィーノは引用している。

おお想像力よ、たとえ周囲で千のラッパが
吹き鳴らされようとも気づかぬほどに、
我々をときに外なるものから奪い去るもの
よ、
誰がお前を動かすのか、感覚はお前を目指して
いないというのなら？
お前を動かすのは天に生じる光、
そのおのずの力か下界へそれを導く御意思
(みこころ)によるのだ。

O imaginativa che ne rube
talvolta sì di fuor, ch'om non s'accorge
perché dintorno suonin mille tube,

chi move te, se 'l senso non ti porge?
Moveti lume che nel ciel s'informa,
per sé o per voler che giù lo scorge.

(同書、132～133)

ダンテの言う「高次元の想像力」(alta fantasia)とは、カオスのような夢のなかで生じる身体的な(五感に基づく)想像力とは区別された、想像の最も高尚な機能を意味しているとカルヴィーノは書いている。そしてその視覚的なメッセージは、「天上に存在する一種の光源のようなもの」から伝えられる、と(同書、133～134頁)。このような考え方は、当時のスコラ哲学を踏まえたものであった。

カルヴィーノはダンテから出発して、さまざまな古今の想像力論を参照しながら、自らの創作におけるイメージの機能についても触れており、読者は、彼の文学を読み解く鍵を図らずも受けとることとなる。想像力の働き方には、言語から出発して視覚的なイメージに到達するものと、その逆の行程をたどるふたつのタイプがあるとして、カルヴィーノは自作を例にとり、つぎのように述べているのだ。『我々の祖先三部作』(『まっぷたつの子爵』『木のぼり男爵』『不在の騎士』)の物語の起源には視覚的イメージがあったのにたいし、『レ・コスミコミケ』の出発点は、科学的な談話から抜き出した陳述だったと。カルヴィーノの創作の出発点となった視覚的イメージは、それが天から降ってきたものでなければ、何に由来するものだったのだろうか？ 『まっぷたつの子爵』に限れば、そのイメージの淵源は、直接的にはヴェネツィアの昔話「まっぷたつの男の子」に、ひいては、それを生み出した民話的な想像力にあったといえよう。

(上智大学准教授)

* イタリア食文化紀行 *

～ヴェネツィア編 その1～

岡本 勇志

朝、目が覚めるとヴェローナの街にいた。いよいよ今日はヴェネツィアへ行く日だ。この旅の最終目的地であり、私が最も行きたかったところである。



【ヴェネツィアのテラスで】

少年時代の私は『世界の車窓から』という番組で見た列車の窓から見えるアドリア海に浮かぶように見えるあのヴェネツィアを見たとき、そのあまりの美しさに度肝を抜かれ、憧れた。死ぬまでに絶対行くのだと心に誓った。それがもう目前にあるのだ。胸は高鳴るばかりである。

いつもより早々と身支度をし、駅へと向かう。この日は朝早かった。なぜなら、この日のランチは、トーディのレストランのシェフの元弟子が務めているヴェネツィアのレストランを予約していたからである。ただ、どんなに急いでいても朝のカップチーノは忘れない。カップチーノをいつもより早く済ませ、駅へ向かった。

予約していた列車をみつけ、乗り込んだ。座る

席は窓側と決めていた。どうしても見たかったからである。ヴェネツィアがアドリア海に浮かび上がるその瞬間を。念願がなかって運良く窓側に座ることができた。

出発までゆっくりしていると、空いていた隣の通路側の席に一人の女性が座った。何気なく見ると、アジア人のように見えた。が、中国系でも韓国系でもない。もしや日本人かもしれないと思い、あえてそっぽ向いた。

ひとり旅をした人なら分かってもらえるかもしれないが、異国の地で一人である同じ系統の人種に出会うと、なんとなくのアイコンタクトで話が始まるものである。でも私はあえてそれを避けていた。せっかくイタリアにいるのに同じ日本人と出会いたくない、どうせなら現地のイタリア人と仲良くなりたいたいと強く思っていたからである。今思えば少し意固地な考えだったかもしれない。

そして例外はなく、この時もそっぽを向いたのである。すると、彼女から声をかけてきた。なんとも流暢なイタリア語で。彼女はパドヴァに行きたらしく、この列車がパドヴァで停車するのかどうかと聞いてきた。私も負けじとイタリア語で、自分も初めてこの列車に乗るから確かなことは分からないが、あなたが持っているチケットと私が持っているチケットの列車番号が同じならまずだいじょうぶでしょう、と返した。

すると彼女は目を大きくして、「イタリア語上手ね！」といった。彼女も僕がイタリア語を話せるのか半信半疑だったようだ。

そこからお互いに話が弾んだ、もちろんイタリア語で。聞けば、彼女は日本とエクアドルのハーフで、3年前からイタリアで仕事をしていて、今日は休日パドヴァに住んでいる友達のところに行くのだとか。日本にも大学時代の4年間住んでいたという。少しの日本語と、母国語であるスペイン語、イタリア語、英語が話せるというかなりハイスペックな人だった。彼女としても、あまり日本語を話したくはないが、日本が恋しい気持ちも少しある。イタリア語を話せる日本人の私とはすぐに意気投合した。

パドヴァに着くまで話は尽きず、お互いのことを語り合った、そして彼女が暮らすミラノで再会する約束をして、彼女はパドヴァで下りた。こんな出会いもあるのかと驚きを隠せない私を乗せた列車は

ヴェネツィアへと向かった。

それから少し経ったとき、ふと窓を見ると海が見えた。そこから窓の外の景色に釘づけになった。もう少しで見える、あの名シーンが！そしてついに目に飛び込んできた。あのテレビで見たそのままの海に浮かび上がるヴェネツィアが。感激のあまり、写真を撮ることすら忘れてしまった。

そして、ヴェネツィアに到着した。駅から橋を渡り、憧れの地に降り立った。さあ！！満喫しよう！

まずは、目的のレストランを探す。駅からヴェネツィア本土へ小さな橋を渡る。まるで夢の中にいるようだった。本当に街が海の上であり、小さな路地や小さな橋で構成されている。少し足を踏み外すと海へ落ちてしまいそう。そんなところである。

流石にこんな迷路のような街で、ぶらぶらしているのは迷子になると、携帯のナビを使いレストランがあるホテルへ向かった。今回のレストランはホテルのなかにあるレストランだ。さて、どんなものが食べられるのか。

ヴェネツィアを散策しながら、ホテルを目指す。人が多く、みんな観光客である。ふと、目をやるとマダムがゴンドラで優雅に過ごしている。

ナビにしたがって歩いていると、大きな広場にでた。これがあの有名なサンマルコ広場。ヴェネツィアの顔といってもいいだろう。



【サンマルコ広場】

このサンマルコ広場には見るからに素晴らしいサンマルコ寺院があり、これぞドウオーモといった

ところか。食事の前にチラッとサンマルコ寺院を覗こうとすると、警備員に止められた。

「おい君！列にならんで整理券を！」

遠くをみると長蛇の列が…

「嘘やん…こんな並ぶんか…なめてたわ…笑」

と一瞬で諦めがつくほどの行列だった。

これでは流石にレストランに間に合わないので、サンマルコ寺院はお預けとなった、結局ヴェネツィア滞在期間なんやかんやでサンマルコ寺院には行かずじまいで帰国することになる。

サンマルコ寺院ともう一つ有名なものがこの広場にある。それはバール。バールといっても普通のバール。では何がすごいのか。

そう、このサンマルコ広場のバールがイタリアカッフェ文化の発祥の地なのである。このバールで貿易商人の船乗り達が眠気覚ましに素早く飲めるものとしてカッフェが提供され、それが今のイタリアのカッフェ文化になったと言う。このバールもふと見ると混み合っていたのでお預け。

さて、広場を抜ける道がナビには記されているがなんと細い道。人1人通れるかどうかという狭い道だが一人旅の探検家気分の私はテンションが上がる一方である。道を抜け、さらに迷路のような道をナビに沿って進んで行くと、大きなホテルが現れた。

そのホテルはバウアーホテルといい、かなり高級なホテルだった。恐る恐るホテルのレストランに行くと、ホテルマンらしき人が怪しげな目で私を見た。それはそうである。高級ホテルにリュックひとつのアジア人が迷い込んできたのだから。

しかし、ここのレストランを予約しているOKAMOTO ですよという、ガラッと対応が変わり、すぐに海が見えるテラス席に案内してくれた。

「おお、さすがシェフの紹介やな」と感心した。席に着くと白ワインをボトルで頼み、食事を始めた。料理はお任せのコースだった。

料理が出てくるまでの間、テラスからは最高の景色と雰囲気を楽しめる。テラスにはヨットの乗り場が隣接し、ヨットで来た客が直接ホテルに入れるようになっている。青空とキラキラ光る海、少し向こうにはさきほどのサンマルコ寺院が見える。波打つ音と揺れるヨットが当たる音、そしてどこかで鶇が鳴っていた。「ああ、来てよかった」と心から思

える。まだまだ若造の私は生意気にもワイングラスを傾けていた。

すると、料理が運ばれてきた。最初は手で食べる前菜。海の幸を使った前菜盛り合わせ、ウンブリアの豆、トリュフを使ったニョッキ、蟹を使ったヴェネツィア名産のショートパスタ、最後に魚のフリット、そしてドルチェというコースだった。



【前菜盛り合わせ】

ヴェネツィアの郷土料理というよりは、アレンジを利かせたレストラン仕様の料理で、好奇心を掻き立てられた。観光客相手に俗化してしまったヴェネツィアでは、イタリアの他の街に比べ昔ながらの伝統料理を出すレストランを探すのは難しい。ローマやミラノも同じことが言えるが、ヴェネツィアは特にそうである。そこらのレストランに入ると、厨房ではイタリア人ではなく移民が安い賃金でコックをしていることもざらにある。

イタリア人からしても、ヴェネツィアは観光客からのぼったくりがひどいと言われるほどである。この次の日まともに体験することを、この時はまだ知らない。

とにかく、素晴らしい食事を堪能し、そのあとシェフの弟子と挨拶して、厨房まで見せてもらった。そして、彼がその日の午後は休みということで、2時間後に会う約束をし、予約していたホテルへ向かった。

ここから私のヴェネツィアが始まったのである。これから、どんな料理に出会い、どんな文化に触れるのであろうかと大きな期待を胸に、夢見ごちになりながらホテルの部屋のシャワーを浴び、一眠りすることにした



【ショートパスタ】

(当館元留学生)

京都下鴨 ダイニングぼてちん

今月のコレンテにご寄稿頂いた岡本さんがおつとめの、京都下鴨にある洋食店です。引き続き今月も特典ご提供頂きましたので、ぜひご利用下さい。

住所：京都市左京区下鴨西本町 21-1-101

アクセス：京都市バス・京都バス「府立大学前」
下車 目の前

Tel: 075-781-0028

HP: <https://www.botechin.com>

特典：ぼてちんのチラシか今月号のコレンテを提示していただくとアイスクリーム1つサービス
(特典期間：2021年7月末まで)

編集・発行 / (公財) 日本イタリア会館
〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町 4
TEL: (075) 761-4356/FAX: (075) 761-4357
E-mail: centro@italiakaikan.jp
URL: <http://italiakaikan.jp/>